

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)

県政の課題(テーマ)報告書

平成30年6月18日

山梨県知事 殿

氏名 小野塚瑞穂
留学先 イースタンケンタッキー大学
留学期間 平成29年8月11日
~平成30年5月19日

1 研究の課題(テーマ)

児童生徒の学力向上のための取り組み

2 概要

与えられた県政の課題(テーマ)の解決に導く考え方及び対応策等

私の県政の課題は、児童生徒の学力向上のための取り組みである。まず、山梨県の教育政策を確認し、そして、私がアメリカ留学で体験したり感じたりしたことを踏まえ、私の考えを述べていく。山梨県の教育政策として重要視されているのが、個性と学力を伸ばす教育の充実である。そして、政策の実現に向けて、少人数教育の充実、アクティブラーニングの導入等が挙げられている。学力向上には、算数や国語などの基礎的な学力だけではなく、社会に存在する様々な問題を解決する問題解決能力が必要だと考える。それらの施策において、どのように取り組んでいくのか、またアメリカ教育の中で重視されていることを生かし、それらの施策以外で取り組めることを述べる。

まず、少人数教育の充実である。少人数教育とはクラスの人数が少なく、教師の指導が全体に行き届きやすく、また学習が苦手な児童生徒の支援を行いやすいという点で児童生徒の学力向上にメリットがあると思う。私が留学中に観察実習をした大学の附属小学校での授業ではクラスの人数が約25人程度で日本の一般の学級人数と比べると少なかった。そして授業の中では、クラスをグループごとに分けて、いくつかの活動を決められた時間ごとに交代して行っていた。そ

の中で1つの活動では担任教師と一緒に問題を解く活動があり、質問などをすぐに聞ける環境が作られていた。そして全てのグループがその活動をするため、全ての児童が授業時間内に先生に質問する時間が設けられているということになる。アメリカでの小学校教育の実態から、少人数教育の中に、さらにグループ活動を取り入れることで児童生徒の学力向上に効果的であると感じた。日本の学校教育でもグループ活動を取り入れることの必要性を感じる。クラスが少人数になるということは全ての学校においてできることではないが、クラスの児童生徒を少人数に分け、グループ活動をすることによって、教師の指導がより行き届きやすく、児童生徒が質問をすぐに教師に聞いて、疑問を解決することができると思う。また教師対児童生徒の関係だけでなく、児童生徒対児童生徒の関係もグループ活動では重要になってくる。例えば、算数の問題を解くとき、同じグループの算数を得意とする児童が、苦手と感じる児童に教えることを通して、児童それぞれの学力向上に影響を与えることができると思う。このように少人数クラスでない場合には、クラス全体を少人数に分けることで、児童生徒がきめ細やかな指導を受けることができ、また、児童生徒同士の関わりからも児童生徒の学力向上が期待できる。

次にアクティブラーニングである。まず、アクティブラーニングとは学習者が主体となって能動的に学習活動を行う学習方法であり、1980年代から1990年代にアメリカの高等教育改革の中で普及していった教育法の総称でもある。新指導要領には、アクティブラーニングという単語を用いず、主体的で対話的な深い学びとわかりやすく説明されている。主体的な学びは、学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学びである。対話的な学びというのは、子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を基に考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学びである。深い学びとは、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせなが

ら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報から考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学びである。児童生徒の学力向上にはこれらの学びが必要であり、これらを授業で実践していくためには、グループでの活動や話し合いが重要である。それらの活動の中では児童生徒はそれぞれの意見を共有し考えを深めることができる。教師は話し合いなどをする前に、まずそれぞれが意見を持つことができるよう指導することが必要である。何も意見がないまま参加することは、それぞれの意見や考えを深めることにはつながらないためである。アメリカでの留学で特に強く感じたことは、人それぞれが必ず意見を持っており、賛成反対に限らずそれぞれの意見が尊重されることである。アメリカの大学での授業では、ディスカッションやグループで行うプロジェクトが多く、クラスメイトは思いついた意見を次々に出していくのがとても印象的だった。私はそれを見たときに、圧倒され何も言えない自分に恥ずかしくなった。意見というまとまったものでなくても、自分の考えや予想として思ったことでも主張することが大切だと気づいた。アメリカでは何も意見を持たないことは参加していないと同等なほどである。日本では、同じような意見を持つことや、誰かが言った意見に賛成することが多くあり、反対の意見を言いにくい雰囲気があることもある。日本では思いやりの文化が強く、それが日本での話し合いのスタイルに関係していると思う。アメリカでの経験から言えることは、思いやりの文化を様々な意見や考え方を受容するという方に働かせ、それぞれが自分の意見を持ち、安心して主張することができる環境作りが学校教育において非常に大切であると考え。また、児童生徒の意見や発言から授業を作り上げていくという授業スタイルに近づけることもアクティブラーニングにおいて必要である。知識をつめこみすぎず、教えた知識を活用する力を児童生徒につけさせるべきである。そのためには、児童生徒にとって身近なトピックを扱い学習した知識を使って解決していくような活動に取り組ませることが大切である。それが問題解決能力の向上にもつながると考える。

最後に、アメリカ教育の重視している創造性“Creativity”を向上させる取り組みである。秋学期と春学期を通して、アメリカの大学付属学校への観察実習や幼稚園での短期実習に参加したり、授業を通して、小学校の図画工作や音楽などの指導法や児童の創造性向上のための活動について学んだりした。その中で最も重視されていたのが、創造性“Creativity”だった。創造性というのは、新たな発見や科学的思考力の源泉となるという面で、学力向上に密接に関わっている。日本でも、指導要領で創造性を育むことの必要性が言われているが、留学で学んだアメリカ教育ほど重要視されていないと感じる。アメリカの教育では特定の教科に限らず、創造性を育むことが第一に考えられており、それがアメリカ教育の特徴でもあるアクティブラーニングにもつながっていると感じる。授業で学んだ指導法の中では、教師はあくまで場や環境を提供し、児童が主体となって児童それぞれが、または、グループで音楽や美術の作品を作り上げるというものが多かった。創造性を重視した授業という意味では、主要教科よりも、音楽や図画工作などの技能教科に児童の創造性を育む可能性が多いに期待できる。創造性を育む授業や活動を作るためには、教師は児童が何かを思いついたり、発見したりする手助けをする役目を果たすべきである。そのためには、できるだけ教材や扱う情報などを多く与えることが必要である。

以上より、私がアメリカ留学を通して、児童の学力向上への取り組みとして、少人数教育の充実、アクティブラーニングの導入、そして児童の創造性を育む授業づくりを考える。日本の教育が理想とするアクティブラーニングを自分の目で見て肌で感じる事ができたのは、教師を目指す上でとても役立つ経験になったと感じる。